



堂免和実、ステップス初個展である。会場に貼られていたプロフィールから抜粋する。グループ展は1993-2001年モダンアート協会展、2005-2012,15,17年点の解展(横浜市民ギャラリー)、2017年JAALA。個展は1995,97年ギャラリーK(銀座)、98,2000年セッションハウスガーデン(神楽坂)、98,99,2001年gallery Satellite(パリ)、2004年天王洲アイルセントラルタワーアートホール(東京)、2008年ギャラリーf分の1(御茶ノ水)、2011年K'sギャラリー(京橋)、今回である。

堂免はギャラリー内にインスタレーション、事務所に平面作品を展示した。平面作品の主題はインスタレーションであるので、やはりインスタレーションについて言及すべきであろう。12隻の舟のような形のオブジェが天井から吊り下がっている。舟には花のような形のオブジェが整然と並んでいる。床に置かれている長方形にも花のようなオブジェが展開している。花のオブジェを支える竹串は包まれ、隠されているので、全てが白の世界である。

白というよりも、光と表現したほうが適切なのかも知れない。近くで見ると、遠くから眼差しを向けると、インスタレーションには様々な角度から光が当てられ、薄らと影を生み出し、インスタレーション自らを翳している。背伸びする、床を這うように見ると、床に花のオブジェが映りこみ、5階のステップスが天空にあるように錯覚する。ステップスギャラリーの吉岡は「この作品は風ではないか」と私に話した。確かに舟であるよりも雲、人や花という事物よりも風という現象であるに相応しい。

吉岡の、これ以上ない良い評を乗り越えなければなるまい。私は堂面のインスタレーションに、炎を見る。地上に点火された炎はみるみるうちに上空へ舞い上がる。それはまるで《伴大納言絵巻》応天門炎上の場面(1177年頃)のように、雲に乗って煙は水平に移動する。《伴大納言絵巻》から離れて考えると、炎は不浄の現代の地、森羅万象を焼き尽くす。そこから我々は何を見つけ、どうすべきであろうか。答えは決まっている。希望を持つのだ。

